

—物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

これまで我国の経済界では、誰れいうとなくアメリカがクシャミをすると、日本は風邪はおろか肺炎という大病にかかるといわれていた。

このたびのアメリカのサブプライムローンに端を発する「金融大恐慌」は氷山の一角にすぎないと考えられるが、ただ関係する分野が多いのが大問題である。

それは、100年に1度の「世界大恐慌」といわれるが、誰れ一人としてその時代に生存して居り、身をもって体験した人はいないのに身近な、限られた情報をもって、あたかも、その道の専門家の如く情報の分析、検討、影響も考えずに単純に対応しようとする「物の見方、考え方」に異をとねたい。

例えば、今から100年前の1909年前後の世界の状況、日本の状況はどうだったのか誰れ一人としてかたる人はいないし、何となく解かったつもりでいる。

輸出依存型の製造業にとって購買対象の人口という面から考察してみると。

西川 潤著「人口」（岩波ブックレット）によると1900年（明治33年）の世界人口は16億5千万人であり、今から100年前の1909年（明治42年）では約20億たらずであり、現在の2009年の約67億に比べるとその購買対象人口は約1/3の時代である。

その経済環境には雲泥の差があり、余りにも乱暴な比較、判断になりかねないのである。

学問的見地から、考察すると1877年（明治10年）に東大、1897年（明治30年）に京大、1907年（明治40年）に東北大、1911年（明治44年）に九大、1918年（大正7年）に北大が開校された時代であり、私立大学は1918年（大正7年12月）の大学令により、

1920年（大正9年）慶応義塾大学と早稲田大学の二校がはじめて設立許可されたにすぎない。

これが100年前の時代背景である。したがって今回の「世界大恐慌」という言葉は、100年に1回あるか無いかの世界的な経済恐慌という大変オーバーな情報にとらえ対応する必要があると考えるべきである。

それ程、情報というもののとらえ方、考え方はむづかしく、愚生は世界中の経済学者を含めて全て総素人の時代であると愚考する。総て未経験なのである。

ただ、現実問題として解決しなければならないのは失業と雇用問題であり、さけて通ることはできない。

そこで、仏教の初期の時代の「物の見方、考え方」を知り、急激に変化するこれからの時代に対応する生き方について考えてみることにしたい。

結果として先人の英智の学習であり活用である。

2. 自然信仰と修験道を知る

どうも最近の日本、何か変んだおもしろいのではないかと思えるようになった。

「他思故有我」、いわゆる「他の人々を思うために自分の存在がある」の日本人の本来持っているすばらしい価値観、倫理観が全く無くなった感がするのは愚生だけではない気がしてならない。

それは、かつてのバブル崩壊を思わせるようなリストラに名をかりた首切り、派遣切りの頻発、失業率の増大、結果として雇用不安となり社会不安につながっている現実の生活環境。

自分のことしか考えない日本人の増大に「山川草木悉皆成仏しっかい」あるいは「山川草木悉有仏性そうもくしつう」という、自然界、世の中に存在するすべてのものに神仏、生命の輝きにみちているという自然崇拜、自然信仰、いわゆる自然に対する宗教的態度、人間として自然に対する畏敬の心、宗教的な謙虚さが失なわれてきた観がしてならない。

日本人の山岳崇拜の考え方は、自然崇拜の一種で山岳に対する謙虚な宗教的態度や行為をさし、山を神とする立場。山を神霊の住拠とする立場。山を己れの修行の場とする立場等がある。

我が国で多くみられるのが修行の場とする修験道の立場である。

修験道は、山に超自然的な威力を認め、あるいは霊的存在を認める古代の土俗信仰としてあったものが民間信仰として生き続け、後に仏教と融合したと考えられている。

役小角を祖と仰ぐ日本仏教の一派で、日本古来の山岳信仰に基づくものであり、かつては山中の修行で呪

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
(野風生)
雅号 樹泉